

「子規と鯛のなますと俳句」

○はね鯛とりのを取とりて押おえて沖おきな鱈ます

子規

明治二十五年夏の句。松山市の西部、三津浜にあった「まぼろしの料亭澁々園」で詠まれた俳句と言われています。子規は、そこで多くの句会を開きました。また、他にも高浜虚子や河東碧梧桐との出会いを記念する食事会を開き、また、友人であった秋山真之らと空前絶後の楽しさとされる新年会を催すなど、若き日の子規が楽しく過ごした場所として語り継がれています。(愛媛県文化振興財団発行文化愛媛No.64参照)

○温泉ゆあ上がりに三津みやの香かのなます哉

子規

明治二十三年夏の句。帰省中の松山から友人に宛てた書簡の中に記されています。書簡では、「早く来給へ御馳走して待てるよ」と記してこの句が書かれていることから、友人を実家に誘うような意味の句であろうと考えられます。

當地ニ於テ喜よろこはしきものハ

海魚うみうしの鮮あまなる事ことにて候まを

いっしょうさんたん
一嘗いっしょう三嘆さんたん

子規が愛した瀬戸の鯛料理

『鯛のなます』

